

幼児期における「身体表現」の教育

—世界に広がるシュタイナー幼児教育を中心に—

広瀬 綾子¹⁾*

1) 新見公立短期大学研究員

(2017年12月20日受理)

本稿では、シュタイナー幼稚園で行われる「身体表現」の教育すなわち、自由遊びにおける身体表現、ライゲン (Reigen) の時間における身体表現、クリスマスなどの季節の行事などで行われる演劇 (幼児劇) を取り上げ、これらの「身体表現」を支える教育理論および教育的意義について明らかにした。この三つの身体表現活動、とりわけライゲンと演劇は、「教師が模範的な身体の動きを示し、幼児はそれを模倣する」との考え方に基づいて行われる。幼児の模倣を何よりも重視するがゆえに、身体表現活動の教育では、とりわけ幼児に示す教師の模範が重要である。幼児が欲する模範とは、芸術的な要素を多く持った模範、すなわち絵画的な要素と音楽的な要素の二つを兼ね備えた身体的な動きの模範であり、教師は、幼児の身体表現活動の教育においては、このような模範を示さなくてはならない。あわせて、幼児期における模倣による身体表現活動は、意志の力を育成し、意志の成長へと導くことを明らかにした。

(キーワード) シュタイナー幼稚園における身体表現活動, 幼児の模倣への欲求, 教師の模範, 「意志」の成長への寄与

はじめに

幼児期の教育も、児童期や思春期・青年期の教育と同じように、押し寄せる時代・社会の波の影響を受けることが多い。そのことは、時代の進展とともに、社会に出廻ったCDやDVD、タブレット端末などが、幼稚園や保育園等に導入されるようになった現在の状況を挙げるだけで十分であろう。

時代、社会の波の大きな影響という事態の中で、たえず問われなければならないのは、真の幼児教育とはどのような教育なのか、社会の波を受け入れて真の幼児教育ができるのか、ということである。もしこのようなことを深く考えることなく、時代の新しい波—例えば、上述のCDやDVD、タブレット端末など—だからと言って安易にそれを取り入れることは、必ずしも適切であるとは言えない。それが、幼児の成長を阻害する場合もあるからである。

真の幼児教育について考えようとするとき、重要なことは、世界の各国で行われている幼児教育の中ですぐれた幼児教育と高く評価されるもの、すなわち長い年月をかけて、「これは、幼児の発達・成長にふさわしい適切な教育である」ということが検証された、幼児教育の理論と実践の実例に学ぶことであろう。適切さが検証された幼児教育の実例との視点で世界の各地で行われている幼児教育をみると、注目に値するのは、R.シュタイナー (Rudolf

Steiner, 1861-1925) の教育理論をもとに実践されている幼児教育である。

周知のように、シュタイナーの教育理論をもとにして実践されている教育は、幼児期、児童期および思春期・青年期の各時期の教育を網羅する教育であり、しばしばシュタイナー教育あるいはヴァルドルフ教育の名で呼ばれる。わが国ではシュタイナー教育の名で呼ばれることが多い。各時期の教育、つまりシュタイナー幼稚園の教育やシュタイナー学校の教育は、1970代に入って、欧米では多方面から大きな関心を呼び、高い評価を与えられるに至った。そのことは、欧米の教育(学)事典やわが国の教育事典¹⁾その他のほかにシュタイナー教育が必ず取り上げられていることをみるだけで分かる。最近では、アメリカの「ニューヨーク・タイムズ紙」(The New York Times, 2011, 10, 23)に取り上げられたシュタイナー学校(教育)の例に、その高い評価・人気度を見てとることができる。

わが国でもこの教育は大きな注目を浴び、とりわけシュタイナー幼稚園の教育には各地の幼児教育関係者たちが魅せられ、この教育を取り入れる幼稚園・保育園が続々と現れた。現在、シュタイナー幼稚園・保育園は、学校と同様にドイツ、アメリカ、イギリス、オランダをはじめとして世界の80か国に設立され広がっており、その園数は、1600園を超える。

シュタイナー幼児教育のすぐれた点は、この教育が90年

*連絡先: 広瀬綾子 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

以上にわたって実践され、その実践の適切さが90年以上の長い歳月の中で実証され検証されてきたことである。そのゆえであろう。最近では、この幼児教育は台湾、中国をはじめとするアジア諸国でも注目されるようになってきている。

シュタイナー幼児教育には、いくつもの特徴がある。縦割り保育やオイリュトミー、絵本の読み聞かせではなく、童話・昔話などの「語り聞かせ」（ストーリーテリング）の重視、CDやDVD、タブレット端末などの不使用、ライゲン等による身体表現活動の重視、人形劇、ぬらし絵などが、その代表的なものである。

本稿は、これらのうち、身体表現活動を取り上げ、それを支える教育理論がどのようなものであるかを究明しようとするものである。まずはじめにシュタイナー幼児教育で行われている身体表現の活動の実際の例について叙述し、その後でこの活動を支える教育理論について論述したい。

1. シュタイナー幼稚園における「身体表現」の教育

幼児期の子どもは、みな楽しさ・喜びの中で生き成長したいと欲し願っている。シュタイナー幼稚園では、この幼児の願いをしっかりと受けとめて教育が行われている。

この幼稚園で行われる「身体表現」の教育は、大きくは三つに分けられる。すなわち第一は、自由遊びにおける身体表現の教育であり、第二はライゲン (Reigen) の時間における身体表現の教育である。第三は、クリスマスなどの季節の行事などで行われる演劇 (幼児劇) である。以下、これらの各々を簡潔に述べたい。

(1) 自由遊びにおける身体表現の教育

登園してきた幼児の一日は、自由遊びで始まる。この自由遊びの時間では、幼児一人一人は、自分が楽しみたい遊びを選び、その遊びに没頭する。ある幼児は、人形を遣う遊びに没頭し、別の幼児は、木製の棒・柱と布を使って小



王様になりきって王冠をかぶり、マントを身につけて遊ぶ園児 (自由遊び)

さな家を作ってその中で遊ぶ。またある幼児は、園児室の隅にある台所でクッキーづくりをしている教師のところに行って自分もクッキーを作る。自由な遊びの一つに、幼児が好んで行う遊びがある。それは、幼児が自分の描いたイメージの人物になりきり、手や足等全身を動かしてその心の中のイメージを表現して遊ぶ遊びである。ある幼児は、王様の王冠を頭に置き、マントを身につけて偉そうにのしのしと歩き回って遊ぶ。また別の園児は、薄いレースのついた布をまとして、お姫様になり、お供の幼児と一緒に身体を動かし、歌い踊る。

心の中に思い描いた人物のイメージを自分の身体で表現して遊ぶ遊びは、一見、幼児の創造性・独創性を思わせる。しかし、その幼児の身体表現の遊びは、必ずしも幼児の創造・独創によるものではない。シュタイナー幼稚園の教育、とりわけ童話・昔話の語り聞かせや人形劇の教育をみれば、そのことが理解できる。幼児たちは、童話・昔話で王様やお姫様のことを聞いて知っており、また人形劇でそこに登場する人物、王様やお姫様の様子をよく見ており、知っているのである。幼児たちは、それらを思い起こしつつ、自分の力でイメージをつくり、若干の独創を付け加えたかたちで身体表現の遊びをして楽しむのである。

(2) ライゲン (輪になって歌い踊って、身体を動かす)

シュタイナー幼稚園では、自由遊びが終わった後に、教師の指導の下に行われる身体表現の教育が組まれている。それは、ドイツ語のReigen (ライゲン) と呼ばれるものである。このライゲンの時間では、人間の生活や自然の中の動物などの動きが取り上げられる。例えば、靴づくりの職人が靴を作るときに見せる動作、家具作りの職人が板をカンナで削るときに行う身体の動き、ピアニストがピアノを弾くときに見せるしぐさ等々である。教師は、輪になった幼児の中に入って、これらの動きを歌を歌いつつリズムカルに行うのであるが、その際、幼児も全員が教師を模倣して身体を動かし、歌を歌いつつ踊るのである。

もちろん、幼児全員と一緒に教師の身体表現活動を模倣しない場合もある。その場合、教師はどうするか。教師は輪に入ることもなく、隅で一人で遊んでいる幼児をみても、この幼児を強制的に輪の中に引っぱり入れることはしない。教師はチラリと視線を送りこの幼児が、自分の意志で自発的に輪の中に入り、教師の身体表現の活動を模倣するのをじっと待つのである。

以下の写真は、ウィーンのシュタイナー幼稚園におけるライゲンの様子を示すものである。

(3) クリスマスなどの行事で行われる幼児の演劇—イエス・キリストの降誕劇—

シュタイナー幼稚園では、毎年クリスマスの時期になると、キリスト降誕劇が行われる。このキリスト降誕劇には



円になって、園児と共にライゲンをを行う教師

二つの特徴がある²⁾。一つ目は、教師が劇に登場し、中心的な役割を果たすことである。園児たちは教師の動作を見てまねて動き演じ、教師の言う言葉をまねて声に出し、教師が歌うのをまねて歌う。例えば身重のマリアとヨセフが宿を求める場面では、教師がストーリーやセリフを語り、それにしたがって、ヨセフとマリア役の園児は円の中央に進み出て、宿屋の戸をたたく動作などをする。他の園児たちは、教師と共に歌いながら、教師が「残念ながらこの宿屋は一杯です」と（ヨセフとマリアの申し出を）断るしぐさをまねる。園児は教師を模倣しながら、歌を歌い、手をつないで円を回ったり、全身を使ってリズムカルに身体を動かしながら劇を行う。このようにシュタイナー幼稚園で行われるキリスト降誕劇は、身ぶり、しぐさなどリズムに満ちた幼児の身体活動を重視した活動であるが、それらはすべて教師の模倣である。

二つ目は、園児たち一人一人にセリフを暗記させ、言わせることはせず、あくまで園児たちは教師のセリフをまねて言うだけということである。ストーリーやセリフを語るのは教師であり、時折、園児たちもその教師がリズムカルに口に出す言葉を模倣して、教師と共に皆で言う。その際、園児たちは動作を行いながら、身体を動かしながら、すなわち身体表現と一体となって、「セリフ」を言う。シュタイナー幼稚園のキリスト降誕劇では、幼児にセリフを覚えさせ、言わせるかたちでの言葉の教育の方法を用いるのではなく、模範となる教師の言葉を模倣すること、そして常に身体表現を伴い、これと一体化させたかたちでの言葉の教育を重視する。

話す力すなわち言葉の教育は、シュタイナーにあっては、単なる耳や口による活動にとどまらない。それは、根源的には、幼児の身体全体の活動・運動から生じるとされる。「子どもは、まず身体全体を通して、話すということをはじめののです」³⁾。キリスト降誕劇では、「トン、トン、どなたかいませんか、今夜一晩泊めていただきたいのですが」というセリフのときには、言葉と同時に必ず宿

屋の戸をたたく動作を行う。このことにみられるように、セリフには必ずその言葉の示す事物や動作をとまなうのである。

2. 「身体表現」の教育を支える理論

前述のように、シュタイナー幼稚園では、「身体表現」の教育は、自由遊びで幼児が自分の描いたイメージ上の人物になりきり、それを身体で表現して遊ぶ活動、ライゲンならびに季節の行事における演劇の三つのかたちで行われる。これらの三つを重視するのは、この幼稚園では幼児の心の中の思い、すなわち日々を楽しく喜びを持って生きたいという思いを、イメージ等を通して身体の動きで表現することが幼児の成長を促進するものであると考えられているからである。

もとより幼児は、そうした思いを身体を動かして表現しようとするとき、その身体表現活動を自分の力で独創的に生み出すことはできない。勝手気ままに身体を動かす表現活動も考えられるが、それでは幼児の心は満たされない。幼児は、どのような身体表現活動をしたらよいかはまだ分からない。それで幼児は何かを求める。その「何か」は、端的に言えば、自分の周囲の人々が示す「模範」である。幼児はこの模範を求めてやまない。

それゆえ、教師は子どもの前で模範の身体の動きを示さなくてはならない。幼児期の子どもは、教師の示す身体の動きの模範を模倣して身体表現活動を行うのである。上述の三つの身体表現活動、とりわけライゲンと演劇は、「教師が模範的な身体の動きを示し、幼児はそれを模倣する」との考え方に基づいて行われるものなのである。

この考え方は、シュタイナーの幼児の本性についての人間学的な見方に由来する。以下、この見方について詳しく考察したい。

(1) 周囲の人の身体の動きへの関心と模倣への欲求

前述のように、幼児の身体表現活動で重要なのは、教師自らが模範的な身体の動きを示し、幼児がそれを模倣することである。この場合留意しなければならないのは、幼児にその模倣を「先生の動きと同じようにしなさい!」といったかたちで強制的にさせることは避けるということである。大切なことは、時間がかかっても、幼児が自分の意志で模倣することができるようにすることである。シュタイナーによれば、どんな幼児にも自分の意志で模倣する力が備わっているからである。

その力が備わっていることは、幼児の本性に注目すれば分かる。幼児が模倣へと向かう源は、幼児の周囲の人への関心にある。周知のように、幼児は家の中では、家具その他さまざまなものに取り囲まれて生活し、外では、クルマや自転車、木や花等の植物、ネコやイヌなどの動物その他

に接して生活する。たしかに幼児は、これらのものに関心を示す。しかし、これら以上に大きく強い関心を示すものがある。それは、人間、つまり周囲の人である。幼児は、自分の周りにいる人に強い関心を示してやまない。では、幼児は周囲の人のどのようなものに関心を示すのか。その服装か、持ち物か、話す言葉か。

もとより、幼児期においては視覚や聴覚をはじめとするさまざまな感覚器官が発達するがゆえに、周囲のモノや人の声・言葉に興味を示す。だが、それ以上に幼児が強い関心を示すものがある。それは、周囲の人の動作・身ぶり・手ぶり・しぐさ、すなわち身体の動きである。シュタイナーは述べる。「……幼児は、外界のある特定のものだけにのみ関心を向けます。決してすべてのものに対してではありません。幼児は、私たちが身ぶり (Geste)、手ぶり (Gebärde)、動作 (Bewegungsverhältnis) と呼ぶものに関心をむけるのです」⁴⁾。

しかし幼児は、単に周囲の人の身ぶり、動作に関心を向けるにとどまらない。注目すべきことには、幼児のうちに、自分の意志でその身ぶり、動作を模倣しようとする欲求が湧き上がってくる。「……幼児は、周囲の人の身体の動きをみると、それを模倣しようとする欲求が出てきます」⁵⁾。この欲求は、単に欲求として心の中にとどまるものではない。自分の身体を動かして実際に周囲の人の動きを模倣する活動を生み出す。

(2) 幼児は模倣をもとに生きる

幼児は、日常の生活のさまざまな場で模倣で学んだ身体表現活動を基盤にしつつ生き成長していく。シュタイナーは言う。「……1歳から7歳までの時期においては、幼児は、周囲の人の身ぶり—これは広い意味での身体の動きを示すのですが—を模倣する活動を中心に据えて生活します」⁶⁾。かれは、幼児がいかに模倣を生活の中に取り入れて生きる存在であるかを、講演の中で自分の経験した実例をもとに述べる。「ある両親がかつて悲しそうな顔をして私のところにやってきました。そしてこう言ったのです。『息子は本当に正直な子どもでした。その息子が盗みをしたのです！』 私はあらためて尋ねました。『本当に盗みをしたのですか？』 そうすると、その両親は言いました。『そうです、わたしたちの息子が盗みをしたのです。息子は、母親がふだんお金をしまっている戸棚からお金を取り出しました。そしてお菓子を買いました。買って自分は食べることなく、他の子どもに分けてやったのです。』それを聞いて私はこう言いました。『あなたの息子さんは、盗みなどしていません。息子さんが盗みをしたなど言うてはなりません！ 息子さんは、母親がいつも戸棚に行ってそこからお金を取り出すのを、毎日のように見ていたのです。盗むなどという考えは、息子さんにはありません、幼児は、模倣する人間 (Nachahmer) なのです。幼児は、母

親が行っていることと同様のことをするのです。それゆえ、幼児も戸棚のところに行ってお金を取り出し、何かあるものを買ったのです。このような幼児の行為は、盗むとか、盗まないといったことについての概念とは全く関係のないことです」⁷⁾。シュタイナーがここに挙げる例と同じような、幼児が模倣に生きる姿は、日常のあらゆる生活の場面に見出される。

例えば、ゴミが落ち、散らかっているのをみると、すぐに掃除用具を手にもって掃除にとりかかる幼児の姿、また玄関で訪問客の靴をそろえる幼児の姿、あるいは皿洗いを率先して行う幼児の姿などは、その代表的なものである。これらの幼児の身体の動きは、すべて親の行為・活動の模倣なのである。

もちろん、幼児の身体の動き・身体表現活動が周囲の人の身体の動きの模倣であるとはいえ、そこに幼児の独創性が全くないわけではない。幼児は、細部においては、自分が心の中で考える身体の動きをし、周囲の人の動きにはなかったような動きをも付け加える。例えば、玄関にゴミがほんの少しでも目につくと、幼児がそのゴミを除いてから靴を並べるといったきめの細かい動作・動きをすることにみられるように。

細部には独創が見られるが、幼児の身体の動きの原型あるいは支柱となっているのは、周囲の人の動きの模倣である。その原型・柱なくしては、幼児は十分な身体の動き・身体表現活動を行うことはできない。その原型・支柱はこのほか重要であり、それゆえその原型・柱を作る模倣は、この上なく大切なものなのである。

幼児の模倣を何よりも重視するがゆえに、身体表現活動の教育では、幼児に示す教師の模範が格別に重視される。次にこのことについて述べたい。

(3) 教師はどのような模範を幼児に示すべきか

幼児は、たしかに周囲の人の身体の動きを模倣する。しかしだからといって、教師が幼児の前で単に身体の動きを見せればよい、と考えるのは、適切ではない。たとえ教師が模範的な身体の動きを見せても、幼児が模倣しない場合が少なくないからである。

幼児が教師の模範を模倣しないとき、教師はしばしばいわば強制的に、「ああしなさい、こうしなさい」と言って模倣させようとする。だが、こう言っても功を奏さないことが多い。教師が模範を示すとき、考えなければならないことは、幼児は教師の示す模範がどのようなものであっても模倣するのではないということである。幼児は、自分の好きな、心から欲している模範が眼前に示されるときにそれを模倣するのである。そうでない模範は模倣しない。シュタイナーはこのことを次のような言葉で述べる。「もし私たちが幼児に対して『そのようにしなさい、あのようにしなさい』という場合には、幼児はそのことには耳を傾け

ません。幼児の眼前で私たちが幼児の欲する（筆者注）行為を実際にやって見せる場合のみ、幼児はその行為を模倣して行うのです⁸⁾。

では、幼児が、心から欲する好きな模範とは、具体的にどのようなものか。シュタイナーによれば、その模範は一言でいえば、芸術的な要素を多く持った模範を言う。この芸術的な要素とは、大きくは、次の二つを意味する。

一つは、絵画的な要素を持った模範である。シュタイナーは、そのような模範の大切さをこう表現する。「幼児は遊びにおいても周囲の人によって演じられていることを本性にかなったやり方で模倣します。4歳の幼児は、「私は自動車の運転手になりたい」と言いますが、文献学者になりたいと言うことはほとんどありません。なぜでしょうか。その理由は、自動車の運転手についてのすべてのことからは、見ることができるからです。直接に絵画的な印象を与えるものは、見ることができます。文献学者の行為は、何ら絵画的な印象を与えません。それは、非絵画的なものです⁹⁾。

幼児は、絵画的な要素に満ちた模範を心から願って欲する。そのような模範が眼前で示されるとき、幼児は、待っていましたと言わんばかりにそれにとびつき、それを模倣するのである。それゆえ教師は、絵になるような身体の動きを示す模範を幼児の前で示さなくてはならない。シュタイナー幼稚園で毎日のように行われるライゲンは、この考えのもとに行われる身体表現活動である。

もう一つは、音楽的なリズムに満ちた要素を持った模範である。教師は幼児の前ではできる限りリズムに満ちた音楽性に富んだ身体の動きを行ってそれを模範として示さなくてはならない。シュタイナーは名著『精神科学の立場から見た子供の教育』（*Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, 1978）では、「音楽のリズムに合わせて踊る動き（*tanzende Bewegung*）」¹⁰⁾の重要性を述べるが、これをかれが主張するのは、身体を動かそうとする幼児の本性のうちに音楽的なリズムへの欲求をみるからである。かれは、このことを次のような言葉で言う。「人間は、自分の身体活動を音楽的なリズムの中に、つまり世界との音楽的な関連の中に運び入れようとする意志を持って、この世界に生まれます。多くの場合、この内的な音楽的な能力は、幼児においては、3歳と4歳との間に存在するものです¹¹⁾。かれは、この一節では、「3歳と4歳の間に存在する」と述べるが、この言葉の意味は、詳しく言えば、この年齢の間に際立ったかたちで現れるということである。幼児においては、音楽的なものへの欲求がこの年齢の間に目立って現れ、その能力は、その後着実に成長していくのである。

上述の、絵画的な要素と音楽的な要素の二つを兼ね備えた身体的な動きの模範が、幼児が心から欲する模範である。教師は、幼児の身体表現活動の教育においては、この

ような模範を示さなくてはならない。このような模範が頻繁に示されるのは、すでに述べたライゲンの時間においてである。

3. 「身体表現」の教育的意義

シュタイナー幼児教育における身体表現の教育は、何よりも教師の模範と幼児による模倣を重視して行われる。この教育で「模範と模倣（*Nachahmung und Vorbild*）」¹²⁾をどれだけ重視しているか。それは、シュタイナーがこの「模範と模倣」を「幼児教育における金句（*Zauberwort der Erziehung*）」¹³⁾と表現していることを見るだけで分かる。では、シュタイナー幼児教育では、身体表現の教育を実践するにあたってなぜそれほどまで模範と模倣を重視するのか。

それを重視するのは、幼児期においては、教師の模範を模倣することが、幼児の内に存在する力を最もふさわしいかたちで成長させ、幼児の健康を望ましいかたちで増進させるからである。身体表現の活動における模範と模倣の教育的な意義は、ことのほか大きい。シュタイナー幼児教育では、この教育的な意義は、通常以上に深くとらえられている。たしかに幼児の身体表現は、心の内の思いあるいは願い、つまり楽しく喜びの中で日々を生きたいという欲求を満たすものであり、幼児の成長に何らかのプラスの力として作用する。身体表現にこのような教育的な意義をみることは、間違いではない。

シュタイナー幼児教育においても、このような通常考えられる見方は存在する。しかし、この幼児教育を深く詳しく考察すれば分かるように、通常の見方よりももっと深い注目すべき見方が存在する。

深い注目すべき見方とは何か。それは、端的に言えば、模範と模倣に基づく幼児の身体表現活動が、「意志」の成長に大きな力を与える、という見方である。シュタイナー幼児教育は、この「意志」の成長に、身体表現活動の最大の教育的な意義を置くのである。そこに教育的な意義を置く見方は、シュタイナー幼児教育を支える人間学から導き出される。以下、その人間学がどのようなものであるかを明らかにし、それとのかかわりで、教育的な意義についてより詳しく述べたい。

(1) 幼児の人間学

—「身体」と「魂」と「霊」より成る存在—

幼児は、児童期・思春期の子どもとも、青年期の青年とも、多くの面で異なる。しかし、「人間」という点では同じである。幼児の本性も人間の本性も同じである。それゆえ、人間の本性とは何かが分かれば、幼児の本性とは何かも分かる。人間の本性の理解は、同時に幼児の本性を理解することでもある。

シュタイナーの人間学によれば、人間の本性は、二分説、つまり人間は身体と精神あるいは物質と心から成り立つとの見方でとらえられるものではない。そうではなく、三分説、すなわち人間は「身体 (Leib) 」と「魂 (Seele) 」と「霊 (Geist) 」の三つから成り立つとの見方でとらえられなくてはならない。人間・幼児の本性は、身体と魂と霊から成り立っている。

身体とは、通常私たちが「からだ (体) 」と言うときの、目に見える物質体の領域のことを意味する。それに対して、魂と霊は、目に見えないものであり、目に見えない力である。魂とは、具体的には、思考、感情、意志といった言葉で示される内的な活動の行われる領域である。そこでは、意欲、欲求、関心、興味、記憶、感激、怒り、喜び、悲しみなどさまざまな言葉で示される内的な活動が泉のように湧き出る。霊とは、身体と魂の最内奥でたえず活動し、身体と魂にすぐれて創造的・生産的・建設的に作用し、人間・幼児を真理や善などの気高い世界へと向かわせる神的能力を持つ目に見えない領域である。シュタイナーは、そのような力を多くの場合、「超感覚的な力 (das Übersinnliche) 」と呼び、この上なく重視する。

このような三つの領域から成る人間・幼児をより深く考察すると、そこに二つの大きな特徴があることが分かる。特徴のその一は、身体と魂と霊が各々バラバラに別個にではなく、相互に刺激し合い、影響し合って、幼児期、児童期および青年期、その後の生涯の中で成長し発達していくことである。その二は、身体と魂と霊の発達の度合いが、幼児期、児童期および青年期で異なることである。シュタイナーによれば、幼児期では、三つのうち身体が際立って発達し、魂は児童期に注目すべきかたちで成長する。霊は、青年期に著しく活発になり、成長する。

人間・幼児は、このような特徴を持つ存在であるが、幼児のうちで際立って成長する身体は、魂の成長・発達に影響を与えるがゆえに、この上なく重要である。では身体が幼児の魂の成長・発達に影響を与えるとはどのようなことか。

(2) 身体表現活動の「意志」の成長への寄与

幼児期に幼児の身体が目立って成長するということは、身体全体が活発に活動することであるが、注目すべきことは、この身体活動には魂の中の「意志」が強く働いていることである。身体の中には、意志が浸透しており、意志が身体に働きかけ、身体を活動へと向かわせる。シュタイナーはこのことを次のような言葉で述べる。「意志的なもの (das Willensartiges) が歯の生えかわり (7歳頃、筆者注) までの幼児の身体全体の中で強烈に働きます」¹⁰⁾。ここに述べられた「身体全体」は、人体の内部の消化器官、血液循環器官その他の器官と同時に魂の内の表現としての身体の動きをも含む。この身体の動きにも意志が働いてお

り、この意志をもとにして幼児は自分の身体を活動させ、身体表現へと向かうのである。

ここで分かることは、身体と意志との関係が意志の、身体 (身体表現) への影響あるいは作用としてとらえられることである。しかし、身体と意志との関係は、このように限定されるものではない。その逆の関係も存在する。すなわち身体の、意志の成長への影響・作用という関係である。シュタイナーによれば、身体表現活動を活発に行えば行うほど、それは、幼児の魂の中の意志により影響を与え、意志の成長へと導くのである。たとえば、ライゲンを活発に行うとき、幼児は手足や身体を動かし活動するが、その原動力となるのは手足を動かそうとする自らの意志である。幼児に備わる力すなわち意志の力は、それが使用されること、すなわち実際に活動することによって強められるのである。前述のように、幼児の魂の領域で活動し成長するのは、思考、感情および意志の言葉で呼ばれるものである。もとより、これらのうち、意志は幼児期に、感情は児童期に、また思考は青年期に、最も際立ったかたちで成長する。このゆえに、シュタイナー幼児教育では、大きな目標の一つに意志の育成が置かれる。この意志の成長に身体活動・身体表現が極めてよい影響を与えるのである。シュタイナーは、これを「身体活動による意志の成長 (Entfalten des Willens durch die körperliche Tätigkeit)」¹⁵⁾との言葉で述べて、幼児期における身体表現活動の重要性を主張する。

先に述べたように、この身体表現活動は、模倣に基づくものである。この模倣は、幼児においては決して受動性を本質とするものではない。それは、能動性・自発性を本質とするものである。それゆえ、模倣による身体表現活動は、意志、つまり積極的に実行する力を育て、将来、自由に生きる人間の育成に確実につながる。シュタイナーによれば、幼児期に模倣による身体表現活動を適切に行えば行うほど、意志の力がしっかりと育成され¹⁶⁾、幼児は、後の生涯において自由に生きることができるようになる¹⁷⁾。シュタイナー幼児教育では、身体表現活動は、幼児の後に展開される自由な人生の享受ということを見据えて実践されているのである。

おわりに

以上、シュタイナー幼稚園で行われる「身体表現」の教育すなわち、自由遊びにおける身体表現、ライゲン (Reigen) の時間における身体表現、クリスマスなどの季節の行事などで行われる演劇 (幼児劇) を取り上げ、これらの「身体表現」を支える理論について明らかにした。この三つの身体表現活動、とりわけライゲンと演劇は、「教師が模範的な身体の動きを示し、幼児はそれを模倣する」との考え方に基づいて行われるが、その根底にあるのは、

幼児が、自分の意志でその身ぶり、動作を模倣しようとする欲求すなわち「模倣欲求」をもつとのシュタイナーによる見方である。シュタイナー幼稚園における身体表現活動は、この模倣欲求に基づく活動であるがゆえに、強制的に行わせることは避けなければならない。幼児の模倣を何よりも重視するがゆえに、身体表現活動の教育では、とりわけ幼児に示す教師の模範が重要である。幼児が欲する模範とは、芸術的な要素を多く持った模範、すなわち絵画的な要素と音楽的な要素の二つを兼ね備えた身体的な動きの模範であり、教師は、幼児の身体表現活動の教育においては、このような模範を示さなくてはならない。

シュタイナー幼児教育では、大きな目標の一つに意志の育成が置かれる。かれによれば、幼児期における模倣による身体表現活動は、意志の力を育成し、意志の成長へと導くのであるが、これはその後続く児童期・青年期において自ら主体的に行動し、人生を切り拓いていく「自由な人生の享受」をもたらすものである。

文献

- 1) Schaub, H: Wörterbuch Pädagogik, 2000. 青木一, 大槻健, 他編: 現代教育学事典. 労働旬報社, 1998.
- 2) 広瀬綾子: シュタイナー幼稚園における演劇の実践と理論. 大阪大学教育学年報第8号. 大阪大学大学院人間科学研究科教育学系, 123-134, 2003.
- 3) Steiner, R: *Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung*, Rudolf Steiner Verlag, S.110, 1923, シュタイナー, R, 佐々木正昭訳: 現代の教育はどうあるべきか. 人智学出版社, 149, 1985.
- 4) Steiner, R: *Der pädagogische Wert der Menschenerkenntnis und der Kulturwert der Pädagogik*, Rudolf Steiner Verlag, S.46, 1989.
- 5) A.a.O., S.46.
- 6) A.a.O., S.48.
- 7) Steiner, R: *Die gesunde Entwicklung des Leiblich-Physischen als Grundlage der freien Entfaltung des Seelischen-Geistigen*, Rudolf Steiner Verlag, S.130, 1921/22.
- 8) Steiner, R: *Der pädagogische Wert der Menschenerkenntnis und der Kulturwert der Pädagogik*, Rudolf Steiner Verlag, S.48, 1989.
- 9) Steiner, R: *Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung*, Rudolf Steiner Verlag, S.117, 1923, シュタイナー, R, 佐々木正昭訳: 現代の教育はどうあるべきか. 人智学出版社, 158, 1985.
- 10) Steiner, R: *Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, Rudolf Steiner Verlag, S.26, 1978, シュタイナー, R, 新田義之監修, 大西そよ子訳: 精神科学の立場から見た子供の教育. 人智学出版社, 40, 1987.
- 11) Steiner, R: , *Erziehungskunst. Methodisch-Didaktisches*, Rudolf Steiner Verlag, S.18, 1919.
- 12) Steiner, R: *Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, Rudolf Steiner Verlag, S.27, 1978, シュタイナー, R, 新田義之監修, 大西そよ子訳: 精神科学の立場から見た子供の教育. 人智学出版社, 41, 1987.
- 13) A.a.O., S.27, シュタイナー, R, 新田義之監修, 大西そよ子訳, 前掲書, 41, 1987.
- 14) Steiner, R: *Die pädagogische Praxis vom Gesichtspunkte geistes wissenschaftlicher Menschenerkenntnis. Die Erziehung des Kindes und jüngeren Menschen*, Rudolf Steiner Verlag, S.96, 1923.
- 15) Steiner, R: *Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung*, Rudolf Steiner Verlag, 1923, S.127, シュタイナー, R, 佐々木正昭訳: 現代の教育はどうあるべきか. 人智学出版社, 171, 1985.
- 16) Vgl. Steiner, R: *Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, Rudolf Steiner Verlag, S.27, 1978, シュタイナー, R, 新田義之監修, 大西そよ子訳: 精神科学の立場から見た子供の教育. 人智学出版社, 41, 1987, 参照.
- 17) Steiner, R: *Die Erziehungsfrage als soziale Frage*, Rudolf Steiner Verlag, S.18-19, 1979.

広瀬 綾子

**Education of "The Physical Expression" in the Infancy
-Mainly on Steiner preschool education all over the world-**

Ayako Hirose

Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

In this paper, I focus on the education of "the physical expression" to be carried out in Steiner kindergarten namely the freedom play, body expression in the time of the "Reigen", and drama (infant drama) performed by the events in Christmas seasons and clarified it about an education theory to support these "body expression" and educational significance. These three physical expression, in particular, "Reigen" and the drama are performed based on a way of thinking, "a teacher shows model physical movement, and the infant imitates it". By the education of the physical expression activity, the model of the teacher who shows it to an infant is important because Steiner makes much of the imitation of the infant above all.